

昔話と幼児教育

北 川 喜美子

昔話の生きてきた時代は、けっして豊かな時代ではありませんでした。しかし、人々は忙しい中から子どもの未来に期待し、一生懸命生きてきました。そこで語られる昔話には、その時代の子どもへの教育的メッセージや子育ての思いが語り込められ、中にはきわめて今日的課題の含まれているものもあります。又、それを語る時、目には見えないが、生き続ける先人達の愛や力を感じます。まさしくそれは、幼児教育の中の良い教材だと考えます。

キーワード：子ども・子育て・コミュニケーション・音楽教育・語り

はじめに

私は、時々、学生に問います。「幼稚園や保育園等で読み聞かせはどうしてするのですか」と。その問になかなか返答がありません。しばらくしてから「楽しいから」「実習の時、して下さいと言われたから」「自分が幼児の時、してもらったから」という内容の言葉が返ってきました。なんと冷ややかな答えだろうと頭をかかえてしまいます。したがって学生たちが読み聞かせに取組む姿勢は、自分だけが理解したり、輪郭のみをとらえたものになっています。学生はただ読みます。そこには子どもとのコミュニケーションや、子どもの成長・発達過程での必要性等については皆無に近いのです。下を向き本ばかりを見る。したがって声は小さく、テンポは速く言葉は不明瞭です。このお話は対象の年齢にあっているか、このお話のメッセージ性や教育的ポイントは何か、作者は何を伝えようとしているか等はあまり頭の中にないようです。それゆえ、絵本読み聞かせ等でよく使用される昔話を中

心に、5つのキーワードを軸に、ここでは昔話と子ども、子育て、音楽教育について論じながら、昔話と幼児教育を考えたいと思います。

1. 昔話と子ども

最近、心や命の教育が叫ばれ、幼児期からの「心の教育」の見直しが幼稚園や保育園の現場、地域と家庭との関係に於いても、常に問題にされています。子どもを取りまく不幸な事件や、殺伐とした世の中の空気が背景にあるように考えられます。又、一方では、少子・高齢社会到来、情報の氾濫、人と自然との関わりの希薄などがあげられ、とりわけ家庭教育や幼児教育の重要性が以前よりも求められるようになり、教育現場も親たちも何か追い立てられるような慌ただしさの中で、アップ、アップしながらこのむつかしい課題に取組もうとしているのが現状ではないでしょうか。

これからの保育は「ともに生きる」(子ども同士・保育者同士・子どもと保育者・親たち

と保育者・その他世の中の文化の実践者たち)が大きく掲げられ、「対話の保育」「共感する保育」「ともに見る・ともにやる・ともに考える保育」が21世紀の保育として求められていると報道されているが、おとなも子どもも忙しく、忙しい中でのきわめてむづかしい課題を背負わされていることになっているのだと思います。

今の時代、子どもを育てることは非常に難しいです。きつくても、ゆるくても。厚くても、うすくても。甘くても、辛くても。強くても、弱くても。ダメなのです。つまりダメづくしなのです。幼稚園の入園のためのお受験戦争、毎日塾づけの小学生時代、おとなも「受験」という二文字にふりまわされながらも、子どもの豊かな将来を考え、必死で生活の基盤である経済を支えてきました。しかし動物園でも、湿度、温度、栄養等すべての面で完全看護で育てた動物ほどうまでたっても自立がむづかしいと言われているように、現状がはたして良いのでしょうか。

毎日、見ている親とか姉妹(兄弟)先生等には、子どもの成長の変化はなかなか認識しにくいですが、昔話はそうした認識しにくい成長の変化を短いストーリーにして、はっきりした変化を見せてくれるのです。私はこのことを大切に考え注目します。ここではグリムの童話「ヘンゼルとグレーテル」の中のグレーテルという女の子を軸に考えますと、話の前半では泣き虫の女の子です。お母さんに、裏の戸に鍵をかけられた時も、道しるべに置いたパンを、森の鳥たちに食べられた時も泣きます。そしてお兄ちゃんのヘンゼルに頼りっきりの女の子です。ところが後半、魔女から「パン焼き窯が十分熱くなっているか見てこい」と命じられたとき、「私、どうしたらいい

かわからないわ、やってみせて!」とやって魔女を窯の中へつつ込みます。あの時のグレーテルの姿は、前半の泣き虫とは、全然ちがいます。これはグレーテルの大きな変化であり、成長を作者は表現しているのではないのでしょうか。実人生での成長の変化には時間がかかります。又、個人差もあり、お話のように、はっきりとしていないかもしれません。昔話の中では、「子どもが育つ、成長するとはこういうことだよ、こういうこともあるよ」という我々に対するメッセージだと思います。昔話を語り伝えてきた人たちは、たくさんの子育てを経験し、その経験に基づいて、子どもはこうやって成長していくもんだよ、と言ってくれているように思われます。

人間は生まれたその日から、視線を求めます。誕生した直後の赤ちゃんが、わずか15分か20分ほどのうちに、自分の誕生に関ってくれた医師や看護師の視線を追い求めます。それは赤ちゃんが人の声を聞く時も同じだと感じます。まなざしや声を求めることは、人間のもつ基本的な信頼関係を樹立させる行為だと考えると、母親はそれに応えてあげなくてはなりません。そしてその双方通行は、母子相互の愛情行動であり、その愛情に基づいた行動は、子どもの不安を取り除く事になるでしょう。そして子どもの周りにいるおとなは、安心と幸せを育てる「まなざし」と「声」を届ける必要があります。親が昔話を讀んだり、歌を歌ったりしてあげることは、親子の一つの姿ではないのでしょうか。ことばの美しさや、ことばにまつわる細やかな思いの中に、やさしい親や、おとなの声とお話のかもし出す雰囲気は、子どもの心を豊かにし、心の教育、つまり良い心を育むことになるのではと考えます。

それでは、私たちおとなは、ていねいに声を聞かせているでしょうか「静かにしなさい!」「はやく!」「やっではダメ!」等、命令、催促、禁止の言葉を連発しがちです。又、今を生きる母親たちは、高度なコンピューターの電磁波の真ただ中で、情報満載の中で生活しているように見えます。忙しい毎日、テレビに子守りをさせているのではないのでしょうか。そして会話をあまりしないのではと考えます。子どもが母親といっしょに市場やスーパー等で買物をしている姿からも、母親が子どもに品物の説明をしたり、生産の苦労等を話して聞かせている姿は見なくなりました。(書かれている文字の読み方や計算の仕方を教えている姿はみられるが…)自分達の好きな品物をポイ、ポイかごに入れ、レジを通過して買物は完了なのです。そこには親子の細やかな会話はなく、同じ時間を共有しているだけのように見えます。「何、たべたい?」「ハンバーグ」「他は?」「サラダ」そしてかごに調理済みの品物がほうり込まれる。野菜のコーナーでも母親は何一つ教えない。ごぼうやれんこんが地上でトマトのように育つと思っている子どもも多いかもしれないし、お魚のコーナーでも切身のまま海を泳いでいると思っても、不思議ではないでしょう。

私は、耳を通しての教育が聞く力を育て、それが話す力へとつながり、考える力を導き、それは成人してからの生きる力を育てると確信しています。まず、お母さんが忙しい中から子どもと多くの会話の時間を持ち、その中から子どもの個性や能力を見つけ出し、良い方向へ導いてほしいと願っています。

永い間、幼児教育に携わってきて思う事は時代の流れと言えればそれ迄かもしれませんが、学生の顔つきが変わってきたという事と、学

生の我々教員に対する考え方の変ぼうです。勤めた頃(今から35年程前)学生は学生の顔をしており、清潔感や若さが漂い、何かキラキラした輝きを放っていた。朝、スクールバスから降り又は、寮からピアノ練習室に走って行く時でも逢えば、挨拶をしてくれた。そして私が練習室を掃除していると、「ありがとうございます」「お手伝いします」と、声がかかった。彼女達の元気で明るい声に励まされ、温かいことばやしぐさの中に、未来を期待出来る幼児教育者の姿が想像できた。そして学生たちの親たち(保護者)もかけ出しの私(助手)に手紙等でエールを送って頂きました。それは親たちが自分の子どもを大切に思い、そのむこう側にいる私をも大切に扱っていたのだと感じ、今でも感謝しています。そこには目に見えないが温かい風があり、まさしくその温かさは昔話を語る感覚なのだと思います。わが子に昔話を語りながら寝かしつける、お風呂に入りながら語ってくれる母親から吹く風であり、子どもとのコミュニケーションの中から、親も子も、お互いに愛情を交換し、自分自身の存在を意識し、守り育てられているという喜びや、温もりは、他へと向けられ、おとなを大切に作る気持ちや、信頼感は、お友達や小動物にまで注がれ、公共心をも育てる心へと広がるのではないのでしょうか。つまり家庭の中の教育や愛情の表現の方向が、現在は少しずれたのではないかと考えます。

2. 昔話と子育て

私は、最近、母親が子守歌をうたったり、お話を聞かせながら子どもを寝かしつける姿や、保育者が、無伴奏で静かに乳児の顔や目

を見ながら歌っている光景を見たことがあります。何もシューベルトやフリースの子守歌を歌えと言っているのではないのです。ご自分の好きな歌でいいのです。赤ちゃんを抱っこして、お父さんもお母さんも、できたらおじいちゃんもおばあちゃんも、みんなで歌ってあげてほしいのです。なぜなら、歌はことばを超越して、その人の人間性、優しさや思いやり、それらを何らかのかたちで伝えてくれるものですから。昔話も同様です。お母さんの声、お父さんの声、保育者の声で語りかけることによって、精神的に安定した状態をつくり出すことができるのです。人間を信頼する思いは、優しく、愛おしく、歌いかけている歌や、語りかける声で育てられるのではないのでしょうか。

私は「うさぎとかめ」「ももたろう」等の昔話は幼稚園で聞いたという記憶より、母親におくどさん（かまど）の前で、お風呂にいれてもらいながら、寝床の中等で聞いた記憶の方が鮮明に残っています。昔話を聞き、いっしょに歌もよく歌いました。「もしも かめよ かめさんよ……」と、そして最後に、コツコツとかめのようにあきらめずにがんばることを諭されました。そしてそれは、母親の若々しい声と共に、当時の家のたたずまいは、歴史といっしょに、今でもすうっと蘇ってきます。世の中のめまぐるしい進歩の中にあって、少しも色あせない昔話を聞き、歌い、あいつちをうち、面白いところや自分の好きな箇所をリクエストしながら、親子のコミュニケーションをお互いに見つけていたのでしょう。

当時は、テレビなどなく、絵本も今のようには沢山出版されていません。又、当時の母親達は誰もが忙しかった。今のよう

に電化製品は家の中に何一つなく、インスタント食品やレトルトな食材などあるはずもなく、又、子どもの数も多かった。今のような「子育て支援」や高齢者の介護にしても、「在宅介護支援」等の公的機関は何もなかったが、どの子ども達とも過ごす時間をちゃんと持っていた。今、考えると不思議です。しかし現在、子どもたちは、昔話を題材にした歌をほとんど歌いません。又、テレビ等の視覚を通して知る世界に慣れてしまった子どもたちは、耳から聞く昔話には興味を示さなくなったと聞きます。

新しい絵本や、おもしろいしかけ絵本や話題の絵本には、保護者も保育者もすぐにとびつきますが、自分の住む土地に伝わる民話や伝説を現在の短大生や大学生の人達はどれくらい知っているのでしょうか？よく「最近の学生さんは昔ばなしをほとんど知りません」という現場の先生方の声を耳にしますが、学生ばかりではありません。学生の母親の年齢（40 齢台前半）の人も、ほとんど知りません。当然家庭で語られなかったのです。つまり日本の経済の成長に伴い、家庭の中が豊かになり、ラジオ、テレビ、電化製品等の便利な品物が増え、親子がいっしょに台所に立ち、包丁の扱い方や野菜の切り方、保存の方法や、ごはんの炊き方を教えこんだ。つまり、いろいろの場で恥ずかしくない「しつけ」等を教えた時代が過ぎ去ったのです。ひと昔前は、町中でも男の子は、小学校高学年くらいになると、父の仕事を手伝い、卒業の時にはりっぱに父と肩を並べるくらいに仕事を覚えたものであり、父も一人の男子として仕事の上で生活できる基礎能力を教えこみ「一人前」に育てる喜びを持っていた。女の子も家事の手伝いが出来、お裁縫が出来、これまた女子

として一人前にしつけられた。そして婚家先でもかわいがられる様にと、子どもの将来に心豊かな望みを託した。そのしつけの間に、子どもはその仕事にすぐあきるので、あきないように、親や周りのおとな達が、いろいろ話を聞かせるのです。自分の手柄ばなし、失敗ばなし等、そして必ず、その土地に伝わる昔話や伝説等をもその土地のことばで聞かせたのでしょう。自分達の生活の中から生まれたお話、歴史の本には載らないが、その土地の人なら誰でも知っている不思議なお話や恐ろしいお話、それは何もない時代にあっては、おとなも子どもも、双方に新鮮で素晴らしい世界に導いてくれる空間であり、疲れをいやしてくれる時間だったのでしょう。同じ話を何度聞いてもおもしろく、親子のかけがえのない時間がそこにあったと考えます。今とちがって子どもの数も沢山、でも、それぞれの子どもに密やかな期待や、たくましく元気に育ってほしいと願いながら、優しさや慈しみの心をいっぱい持ちながら……。しかし、このような光景は今、すっかり様変わりしてしまいました。幼稚園へ通う為の塾ができ、小学生の多くが塾づけの生活を過ごし、夜の九時すぎに帰宅し、食事後、又、勉強をするのです。これではいくら路地や広場が仮にあったとしても、子どもの姿はみられないでしょう。昔話などとてもないと思われるかもしれませんが。そして、子どもらしい遊びはどこかに追いやられてしまいます。

昔話の中には現在の教育から見れば、とてもない理念もありますが、昔ばなしを隅っこに追いやった結果、子ども達はテレビゲームのシュミレーションのように人を殺してしまうことになった一つの原因をつくってしまったのではないかと考えます。人の命は失われ

たらもどらないのですが……。日本の男の子達は誰もが夢中になって「チャンバラごっこ」をして遊んだ。切ったり、切られたり、でも大きな事故には至らなかったと思われます。(小さな怪我はあったであろうが)そこには、子ども同志のルールがありました。「顔は傷つけるな!」「頭はなぐるな!」と、それは少し前のおとな達のしつけが生きていたのである。世の中に出た時の恥ずかしくない行儀やしつけ、他人に迷惑をかけない為の心配りや気配り、が受け継がれていたのです。

今、子どもたちは、チャンバラごっこをしなくなりました。しかし人間には、「闘う」本能があるのです。小子化で甘やかされ、生きていくためのしつけやルールを教え込まれていない子どもたちに、闘う本能は無邪気に、平気で人を倒す(殺す)ことに罪悪感をもたないふうになっていったのです。

私は、毎月、老人福祉施設で、「音楽セッション」をさせていただいていますが、その施設の職員の方がおっしゃるには、「ご老人にとって何よりも大きな慰めは、幸せな子ども時代の思い出であり、子ども時代にいい思い出を沢山お持ちの人は、今も幸せですよ」と。今の子どもたちにとって、どのような幸せの蓄積があるのでしょうか。昔を振り返った時、精神的に疲れきった子どもらしくない姿、塾通いに明け暮れた姿しか浮かんでこないのではないのでしょうか。どろんこになって友達とすもうをした日、汗だくだくになって、真夏の陽ざしの下でボールを追いかけた日、兄弟げんかをして涙がかれるまで大泣きした思い出、遠足でのどをうるおしたあの山の水の冷たくておいしかった味等、おとなも子どもも、のびのびとした子どもらしい生き方を、おとなになって、老人になった時、あったかい、豊

かな思い出が浮かんでくる子ども時代を考えたいものです。子育てはむずかしいものでなく、楽しいものですという感覚をもって子どもとのコミュニケーションを考えなくてはいいけないでしょう。そして考えてみれば、昔話には、子どもの暮らしのさまざまなしつけや、生き方の戒めや、心がけなどを教える「生きたことば」の役割を果たしてきたことが意外に多いと思われます。昔話はシンプルであり、時代・場所・人物を具体化せずに語ることでできるものであり、想像力と創造力を育むものであり、聞き手に余韻を感じさせる又、考えさせる内容を含んだ素晴らしい教材だといえるでしょう。子どもの耳に温かく、優しく、ていねいな言葉でくり返し伝えたいものです。心を和ませる言葉は、信頼感や創造性など、さまざまな「生きる力」を育てます。これから先も世の中はさらに複雑になるでしょう。私達は今迄以上に自分をみつめ、人間が機械に支配されるロボットにならぬように、うるおいのある心をもった人間であり続けなければなりません。

昔話の中には、勧善懲悪の物語が多く、勤勉正直を美德とし、教育に良いというわけで、子どもにも教えてきました。しかし、ここでは正反対の「三年寝太郎」という昔話について考えてみたいと思います。この昔話は全国的に分布していて、少しずつ地方により違いはありますが、あら筋はこんな話です。むかし、ある所に、少しも働かないで、寝てばかりいる若者がおった。みんなからばかにされ、「あいつは役立たずの寝太郎だ」と言われていた。そして何年もすぎたある日のこと、若者は、町で鳩とちょうちんを買って帰り、となりの長者の庭の松の木に登り、鎮守の森の神様になりすまし、大声で叫んだ。「長者よ、

よく聞け！お前の家の娘にとりやりの寝太郎をむこにせよ、むこにとらなければ、お前の家はたちまち傾くであろう」そしてちょうちんに火をつけ、それを鳩の脚に結び鎮守の森の方に向って飛ばした。灯がヒューと森の方へ走ったので長者はすっかり本気にしてしまった。そして長者の娘むこに寝太郎になったという話である。現在では、悪知恵を働かせたぐうたらな寝太郎のような若者は、悪いやつだと、又、こういう話は子どもの教育には良くないと判断するかもしれません。しかし、こうゆう話を笑いながら伝えてきた人たちは、悪知恵には違いないが、とにかく知恵を出して、自分の幸せを獲得していった若者に人生のおもしろさを感じ、応援したのでしょう。悪知恵も人間が育っていく途中では使うものだという、ゆうゆうたる子ども観がみられます。

人は誰でも、若い時は眠いものです。いくらでも寝られる時期があるのです。ある年齢を過ぎると、そうは寝られないのです。四十才になっても眠っているかという、そんな事はありません。誰もが、立派に社会人として何かしらの仕事をしています。そしてこの寝太郎と同じように少しの悪知恵を使ったりして社会の中でがんばっているのです。ところがおとなになると、この眠い時期のことを忘れてしまうのです。おとなは、自分は眠ったことはない、という顔をして、子どもに「勉強しろ！」「勉強しろ！」と毎日言っけてしまいます。当然、おとな達は、眠っていた時期から何年もたっているし、立場や責任を背負いながら、社会の一員として生活しているのでしかたのない事かもしれません。そんな時、昔話は「大丈夫だよ、一生寝ているのじゃないよ、やがて起きるよ」と言ってくれている

のだと思います。人間の成長を長い目で見ることを、周りの若者たちの成長を沢山見る中から感じとっていったのでしょう。

おとなも、子どもも、ゆったりとした時間の中に身を置くことができたのでしょう。しかし現在、仲間と自由に遊ぶことも、習い事や、勉強のスケジュールが優先し、思うように遊べません。子どもがちょっとでも悪いことをすると親はすぐ学校に呼び出され、学校の責任をも問われたりします。ちょっと学校へいくのがいやになり、ちょっと休むと、すぐに教師が次々に家にやってきます。寝太郎のように寝てばかりいられないのです。子どもたちにとっては居心地の悪い時代なのではないでしょうか。今、豊かになったからこそ昔話からのメッセージに耳をかたむけることが大切だと思います。

もう一つ「わらしべ長者」についても考えてみたいと思います。この昔話のあらすじは、財産分けで、たった一本のわらしべをもらった末の弟が、偶然の一致の重なりにより、そのわらしべを困っている人に与えることにより、そのわらしべが、はすの葉になり、みそになり、名刀になり、そして最後に長者の娘を嫁として獲得していく話です。昔話研究者・小澤俊夫氏は、はっきりとこの話を人間の成長として取りあげています。子どもの成長のプロセスを語っていることは明らかであると述べています。「子どもは自分が獲得して持っているものと出遭った時、それを確実に自分のものとして、次の段階へ進むことができる」と、つまり子どもの成長には時が必要であり、この昔話わらしべ長者から、「その時がくるまで待つてやれ、待つてやろう」という子育てのヒントが隠されていると感じます。

現在の日本ではとにかく早期に、早くたく

さんの事を教えこむことが重要だという考えが多いとおもいます。早期と速度への信仰がとても強いようです。ゆっくり見守り、待つという考え方は、もう古いのでしょうか。子どもを育てる時、その子の幸せな将来を考えるならば、その子がいま、わらしべの段階にいるのか、はすの葉の段階にいるのか、みその段階なのかを何を考えているかを観察し見きわめる必要があります。そして、子どもの成長をゆっくり見守らねばならないと思います。

3. 昔話と音楽教育

私が、授業の中で、大切にしている事は、基礎的な知識の上に立って、学生同志がお互いを見たり、お互いに考えたり、お互いを創ったりすることです。そして、そこで出た考え方や、作品、エネルギー等をまとめて発表する場面や場所を提供することです。その一つに「オペレッタの制作と試演会」があります。これは、学生一人ひとりが、いろいろのお話を題材とし、音楽劇（オペレッタ）を創るのです。つまり受講生全員がオペレッタの作者になるのです。台本から作り上げるのです。提出された作品の中から、子どもにふさわしい教材（音域・演奏時間・理解度）であるかをチェックし、選択した作品をグループで発表するのです。あくまでも授業の中での発表なのですが、自分の作品を又、友達の作品を仕上げていくという喜びは、市販されている作品を仕上げるのではない、オリジナルなものを発表するという事も伴って、熱が入ります。みんなで相談、意見を出しあい、キャストを決め、制作を進めていく意欲的な姿勢に、現場でうまくはばたいていってくれる保育者

の姿を垣間見ることができます。実に頼もしい限りです。この授業の中で、オペレッタ創作を教材にとり入れてから二十年近くになりますが、段々と大げさになり、毎年近くの幼稚園や保育園に出張公演するまでになりました。そして実さいに演じていく中で、声の大きさ・ことばの明瞭度・動き・立ち位置等を学びとっているように見受けられます。どんなにおもしろい話でも、声が小さかったり、ことばがはっきりしていないのは台無しです。むだな動きや、わけのかわらない動きもイメージを壊してしまいます。又、舞台の人物が重なりすぎたりするのも、見る側からすると最高に見にくいです。これらの事柄を、自分のグループからも、他のグループを視ることによっても学びとっています。つまりオペレッタを作成し、試演することは、声楽の授業と幼児音楽や動きを伴うリトミックや幼児体育等の授業とのコラボレーションであり、現場ではいろいろな場面で活かせる要素を含んだ授業だと考えています。

毎年、同じ傾向にあります。今年度の提出作品の中の、選出教材の数の上では、1位が「赤ずきん」でした。作品の中の主人公とキャラクターのかわいらしさが、女子学生には人気があり、登場人物の数や場面の転換等を考えてのことだと思われます。そして学生達の一番好きな場面は、赤ずきんが、おばあさんに化けたオオカミに、「どうして、そんなにお耳が大きいの」「どうして、そんなにおめが大きいの」と次々に疑問を投げかける場面です。きっと自分の子どもの頃、どうして？なぜ？と、何でも疑問に思い、聞いていた当時の姿を投影させているのでしょう。そして、次に好きな場面は、以外でしたが、お母さんが赤ずきんに「よりみちをしないでね」とい

う場面です。これもやさしい母親から注意を受けたのに、よりみちをしてしまった子どもの頃の体験を思い出しているのではないのでしょうか。これは二つとも、子ども達の好きな場面とどこか一致しているところが見受けられます。

お話を作り上げていく上で、大切にしていることは、その作品からのメッセージです。子どもたちは、昔とちがって、耳や目が肥えています。しっかりと、その作品のもつ良さや、教育的な箇所、おもしろいところ等を、子どもにわかり易く伝えることのできる作品に仕上げることです。唯、楽しく演じるだけでなく、しっかりと中身を伝えることです。そのためにも、年齢に応じた作品（教材）を選ぶべきです。

学生達の提出作品の約七割が、外国の昔話や民話であり、あとの三割が日本の作品です。主人公のキャラクターが好き、おもしろさ、登場人物の人数等で題材を選んだり、たまたま目についた本や、家に持っていた本、ずっと自分が好きであった本から作品をつくりあげています。新しいものでは、「ぐりとぐら」「11ぴきのネコ」「ノンタン」等のシリーズものが選択されています。学生達が、自分のオリジナルな作品を仕上げる中から、お話の良さ、子どもに伝える力のあるもの等を、真から理解していつてくれるものと考えます。

昔話は先人達の愛の贈り物です。そして名もない人達の魂の伝承でもあります。そして何よりも心の和むものです。それは、「むかし、むかし……」「とんと、むかし…」ではじまるリズムの良さは、母親におんぶされたり、だっこされて眠ったあのなんとも言えない「温もり」と、「ゆさぶられ感」にあるのではないのでしょうか。又、人間も動物の一種として、命

をもらっていきっていることや、プロセスでは苦労はあっても、ゴールで幸せになれることを伝えている素晴らしい教材であり、昔話は、いろいろな動物や物を、人間の存在との間に精神的断絶がない世界です。だから、たぬきもきつねも話をし、笑い、泣く。魔女も小人も悪魔も、おなかがへり、淋しがる平等的な世界なのです。豊かな時代、今一度、昔話をみつめ直し、教育の原点を考える時期がきているように思います。

おわりに

昔も今も、子どもたちは昔ばなしが大好きです。しかもテレビ等の一方通行でなく、語り手と聞き手の織りなす双方通行を感じながら、お互いのスキンシップやコミュニケーションのとれる空間が好きです。昔話はそれを可能にしてくれる最高の教材です。温かくて、豊かな双方の共同作業がそこにあるからだと思います。

幼稚園や保育園等では、地域に愛される園、地域と共に育つ園、等のキャッチフレーズを掲げているのをよく耳にします。その土地に伝わる民話や、伝説。近くにある神社等の歴史や名前の由来等、お地蔵さんは、いつ頃からこの場所におまつりしてあるのか等、子ども達に話して聞かせてあげる宝物がいっぱいあるかもしれません。赤ずきんもシンデレラも確かに良い教材にはちがいありませんが、自分の住んでいる土地のお話。おじいちゃんもおばあちゃんも、お父さんもお母さんも知っている、その土地に伝わるお話を、園で聞いた時の感動は、一生忘れないでしょう。お話を聞いた当時のお部屋のようす、語り手の声や表情等、鮮明に記憶に残ることでしょう。

園全体で、これから子どもたちのためにとりくんでいただきたいと願っております。

子どもがおとなになり、やがて老人になった時、それはなつかしさだけでなく、素晴らしい個人の遺産だと思います。その時、「心の教育」の生きた教材として、昔話を思い出していただくことでしょう。

引用・参考文献

『昔話入門』

小澤俊夫 ぎょうせい 1997

『昔話セミナー』

小澤俊夫・昔話研究所 2005

『お話とその魅力』

相馬和子 萌文書林 6989

『昔話と子育て』（昔話研究と資料）

日本昔話学会・三弥井書店 2002

『日本の民話を学ぶ人のために』

福田 晃 世界思想社 2000

『21世紀の音楽入門』

音楽芸術社 2005

『昔話・絵本の再発見』

小澤靖夫 古今社 2005